

Title	ラテン語の空間表現
Author(s)	山末, 一夫
Citation	大阪外国語大学学報. 48 p.103-p.117
Issue Date	1980-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80788
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ラテン語の空間表現

山 末 一 夫

Spatial in Latin Expressions

Kazuo YAMASUE

When we look up a Latin word in a Latin-English dictionary, we are often at a loss to find many synonymous equivalents. *Cassus*, for example, ‘empty’, *inānis* ‘empty’, *vacuus* ‘empty’ and *vānus* ‘empty’. But on closer examination of the context, we find that these words have subtle differences of meaning. English words used in translation are apt to lead us to misunderstanding. We cannot understand Latin sentences correctly unless we read them carefully in their contexts.

In bilingual dictionaries, *ante*, *prae* and *pro* are all translated into ‘before, in front (of)’, but their contexts tell us that these three words are distinguished in their usage. *Ante* means ‘in front of (the object to which the agent turns, goes, etc.)’, and *pro* ‘in front of (the object which is located behind the agent)’. *Prae* is almost always used together with *se* when it refers to a spatial meaning. *Prae se*, therefore, means ‘in front of (the agent) himself’.

Likewise, the meanings of *longe* and *procul* are difficult to distinguish, because they are given very similar words in translation. Strictly speaking, *longe* refers to the distance between the agent and a point far from him, and *procul* means ‘away from the agent and beyond his range of vision’.

Super and *suprā* are often confused in their usage particularly in Late Latin. But, while *super* means merely ‘on, above, over’, *suprā* is always opposed to the corresponding lower space even if the lower space is not explicitly expressed in the context. Both *subter* and *infrā* are opposed to *suprā*, but they are distinguished from each other in meaning. The former means ‘hidden under’, the latter ‘to/at a lower level (than)’.

1

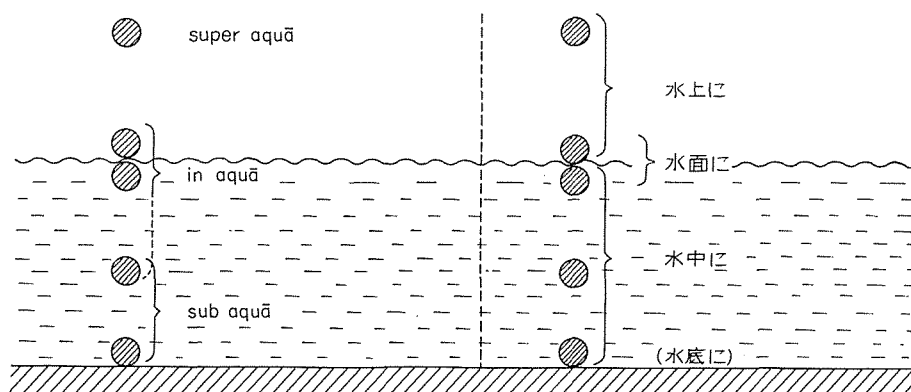
われわれの周囲をとりまいている空間はたとえそれが連続したものであっても、われわれはその全体を一つのものとして表現する必要に迫られる場面に身を置くことは少ない。われわれがトンビのように空中を滑空することがあったとしても、言語でそのときの周囲の状況を描写するには、自分の上下、左右、前後、遠近などの区割りと尺度で区切って、逐次、表現しなければならない。一度に周囲すべての方向、遠近を表現する語を見出すのはどの言語においても困難である

う。われわれが言語で表現する空間における位置は、それが自分または対象物とどのような関係にあるかによって表わされることが多い。つまり、ある与えられた場所を基準に、そことどのような相対的な位置を占めるかを表現すれば、そこに空間における位置が定まるといった方法がとられることが多いのである。‘山の麓へ’とか‘海上に’とか‘目の前を’といった種類の表現である。‘山’、‘海’、‘(自分の)目’もある空間の位置を占めているのであるが、それは既定の基準点として扱われる。そのような基準点となる名詞もある意味では空間を表現する語であるが、これらは言語が異なっても意味の差が比較的少ない範疇に属する。問題となるのはそれらの基準点との位置関係を示す空間の区切り方が言語ごとに異なっているという事実なのである。大げさな言い方をすれば、空間（ひいては世界）の認識のしかたは言語によって変わることになるのである。それはちょうど、プリズムで分光した太陽光線のスペクトルを慣習として何色に分けるか、またスペクトルのどの辺からどの辺までをある色名で呼ぶかが言語によって異なっているのと似ている。

手近なところで例をとってみても、日本語の‘上に’を英訳する場合、on, above, over, up などのどれを使うのか、または他にどんな語が適当なのかは文脈によって判断しなければならないといった問題にたちまち直面する。ラテン語の in は英語に訳す場合、少なくとも in と関連する名詞の格をも考慮して、in, on, into, onto の区別をしなければならない。in aquā は in が‘上に’と‘中に’を区別していないので、それだけでは‘水上に’なのか‘水中に’なのか判断できない。しかしこれはラテン語の話し手が‘上に’と‘中に’の区別ができなかったということをももちろん意味するものではない。この点の両言語の差を理解するために in aquā の範囲を図示してみよう。

sub aquā は文字どおりに訳すなら‘水下に’であるが、これは日本語では‘水中に’または‘水底に’と訳さねばならない。in aquā は‘水面に’がやや近いようである。

二言語を対照した場合のこのような語の意味のずれは、単に空間の区切り方のみにとどまらず、言語の体系全体にかゝってくる問題である。しかしこゝでは、空間の区切り方のちがいを表現



する語の範疇のうちでも、副詞、前置詞、形容詞の一部しかとりあげない。それらは主として、現代の我々の感覚からすれば意外なものや、西欧近代諸語のラテン語辞典の空間表現に使われる語からは理解にくいもの、誤解を招きやすいものばかりに限ったつもりである。それというのも、西欧近代諸語の洗礼を受け、それを介してラテン語を理解しているわれわれの陥りやすい陥穽から一歩でも抜け出るための手段を講じたいからである。ラテン語の国語辞書なるものを当時のローマ人は残してくれなかったので、われわれが手にする辞書といえば専ら西欧近代諸語の bilingual な辞書である。しかしこの種の辞書は便利ではあるが、いくつかの欠点をもっている。まず、複数の語に同じような訳語が出ている場合、それらの語の意味の微妙な差が理解にくいことである。筆者が小型軽量であるため常用している D.A. Kidd 編 *Collins Latin Gem Dictionary* を例にとってみる。

- cassus: a. empty; devoid of, without (abl.); vain, useless
inānis: a. empty, void; poor, unsubstantial; useless, worthless, vain, idle
vacuus: a. empty, void, wanting; vacant; free (from), clear; disengaged, at leisure;
(value) worthless; (woman) single
vānus: a. empty; idle, useless, groundless; false, untruthful, unreliable; conceited
[a. は形容詞, (abl.) は奪格と共に使われることを示す.]

事情はどの辞書をとってみても大同小異である。辞書が大きくなるほど、文例とその出典個所がふえる。もっと大きな辞書や、種々のテキストで数多くの用例に接しないかぎり、cassus, inānis, vacuus, vānus の意味の差を正しく把握することは困難であろう。いま一つの問題は、訳語による意味のずれをどの程度補正できるかという点である。殆どの場合、正確に一語で対応する訳語がないから複数の訳語をあてるわけであるが、多くの訳語をあてればあてるほど、余分な意味の範囲がその語に割当てられることになる。空間を表現する語ではないが ratio のような語の意味を筆者自身どの程度正確にとらえているのかはなはだ心もとない状態である。複数の訳語から、このような意味であろうと推定しても、その際に明示できるような手続きがあるわけではなく、いわばカンに頼っている部分が大きいのである。このような不安定な意味のとらえ方から脱却できる手だてはただ一つ、数多くのテキストにあたることによって、辞書に載っている意味の余計な枝葉を、次第に文脈という鋏でもって剪定していくことである。近代語の訳語による誤差をテキストによって補正し、本来の意味をさぐる作業は、空間の区切り方に関してはとくに必要である。言語のこの部分は前述のように言語ごとに異なるからである。

2

ゲルマン諸語の話し手には意外な空間のとらえ方とうつつるらしく、有名な例であるので、まず altus をはじめにとりあげる。altus は‘高い’と同様に‘深い’をも意味する。それは山や塔や樹木に使われるだけでなく、海や河川、井戸などをも形容する⁽¹⁾。次の例では根、傷口にも使われ

ている。

- (1) *virtus est una altissimis defixa radicibus*—Cic. *Phil.* 4. 13
‘雄々しさとは最も深い根のところにまで絡みついたものなのだ’。

- (2) *quamquam vis alto vulnere tardat*—Verg. *A.* 10. 857
‘^{ふか}深傷うけ はやる力は 鈍るとも’

副詞形 *altē* も ‘高く’ と同様に ‘深く’ を意味する。後者の例のみをあげてみる。

- (3) *si ab aqua summa non alte est terra dicitur vadus*—Var. in Serv. *A.* 1. 112
‘大地が水面から深くないところにあれば、浅瀬と呼ばれる’。

- (4) *eoque tempore interiecto altius effosi specus*—Tac. *Ann.* 12. 57
‘そこで時間をかけてもっと深く水路が掘られた’。

名詞 *altitudo* はもちろん ‘高さ’ と ‘深さ’ の両方向の意味をもつ。

このように両方向にまたがる空間のとらえ方は *altus* だけにとゞまらない。名詞 *fastigium* は ‘とがった先端’、‘傾斜、坂’、‘屋根の稜線、切妻’、‘高所、頂上’などの他に ‘高さ’ と ‘深さ’ を同じように意味する。

- (5) *turris...quae superare fontis fastigium posset*—Caes. (Hirt.) *B. G.* 8. 41. 5.
‘櫓は泉の高さを越えることができるように’

- (6) *forsitan et scrobibus quae sint fastigia quaeras*—Verg. *G.* 2. 288
‘おそらくは 溝の深さは 如何ほどに すればよいかと 君問うか’

他にも形容詞 *convexus* は ‘凸面の’ と ‘凹面の’ の、副詞 *penitus* は ‘内部から’ と ‘内部深くへ(に)’ の、副詞 *supernē* は ‘上から下へ’ と ‘上へ向って’ の、それぞれ両方向にまたがる意味をもっている。部分的にせよ、同一の語で相反する両方向の空間を表現する傾向がラテン語にあることに、われわれは興味をそゝられる。

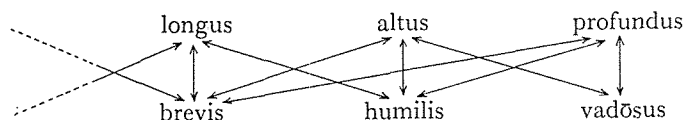
‘深い’ の意味では他に *profundus* があり、*caelumque profundum* ‘蒼窮なる天も’ (Verg. *A.* 1. 58) のようにこの語もやはり上方向へ ‘深い’ ことをも表わすが、*altus* とちがって、‘底知れぬほど深い、底なしの’ の意味である。この語は語源的に *fundus* ‘底’ の要素をもっている⁽⁹⁾。*profunda altitudo* ‘底知れぬ深さ’ (Tac. *Ann.* 2. 61), *mare profundum et immensum* ‘底知れず、巨大な海’ (Cic. *Planc.* 15) などの例においても、単に ‘深い’ では十分に意を伝えていないことになる。また、この語は *saltusque profundum* ‘昼なを暗き深林も’ (Verg. *G.* 2. 391) のように、水平方向に ‘深い’ 場合にも使われる。

では ‘深い’ の逆の ‘浅い’ (こゝでは空間的な意味だけに限定する) はラテン語ではどのような語で表現するかをみてみると、意外にも *brevis* に出くわす。他に *vadōsus* があるが、これは *vadum* ‘浅瀬’ からの派生語で、川、海、港、海峡、岸などの水深に関して専ら使われる。一般的 ‘浅い’ は *brevis* であるが、この語はむしろ ‘短い’ と言う方がその意義を正しく伝えている。*brevis* の意味範囲は一言では表現できないが、空間的なものに限っても、長さに関しては ‘短い’、

高さに関しては‘低い’（人の背丈、木、動物など）、深さに関しては‘浅い’、幅に関しては‘狭い’、広さ（二次元の）に関しては‘狭い’、道のりに関しては‘近い’など、現代人の感覚でもってしては律しきれないほど広い⁽³⁾。brevis の反意語としては longus が対応するであろうが、この語には、深さに関して‘深い’や幅に関して‘広い’の意味はない。

altus とは逆に‘低い’と‘浅い’を同一の語で表わす形容詞 humilis もある。語源的には humus ‘地面、地上から’派生した語であり、本来は‘地上の’意であつたらしいが、‘地上からのへだたりが小さい’の意味になっている。それは、建造物、人間、動物、樹木などの高さが‘低い’だけでなく、天体、鳥などの比較的‘低い位置での’動きをも表わす。ただ、‘浅い’の意味としては、修飾する名詞が一部の例外的な用法をのぞけば、溝、堀、谷川などの地上につくられた水路に限られてくる。

こゝで、互いに反意語である関係を \leftrightarrow で示すことにすれば、上述の語の相互の関係は



とでも表わせるであろう。もとより、一つの語にその意味範囲に関して完全な一個の反意語があるわけではないのであるから、一対一の対応ではない。たゞ、このような表示でも、意味のどのような点において反意、反義であるのかが明示できない欠点が残る。単純に一対一の対応で反意語が存在するなら、

長い	高い	深い		long	high	deep
↕	↕	↕	または	↕	↕	↕
短い	低い	浅い		short	low	shallow

と表わすことができるし、また、われわれの言語感覚の予断をもって、bilingual なラテン語辞書を単純に理解すると、

longus	altus	profundus
↕	↕	↕
brevis	humilis	vadōsus

なる関係が成り立つと思ってしまうがちである。この表示もこの限りにおいては誤ってはいない。しかしこのような理解の仕方では、ラテン語は素直に頭の中で動いてはくれない。

3

こゝでいまい少し longus の意味を考えてみることにする。‘長い’を定義風に説明すれば、‘連続した物体の端から端までの隔たりが大きい’（新明解国語辞典）となるであろうが、これは longus とは一致しない。それよりも‘垂直方向に関して’という語句を最初につけ加えれば、むしろ altus にその定義があてはまる。altus は‘垂直方向に長い’とも言える概念だからである。altus はヴェ

クトル的なのである。それに対し longus は下向きの垂直方向には使われない（‘深い’の意味はない）ので厳密にはスカラー的ではないが、その点を除けばスカラー的と言えるであろう。longus は垂直下向きを除いて方向に関係なく‘長い’と感じられるときに使われたのであって、それが他の言語の‘高い’とか‘遠い’の意味範囲にまで及ぶことになるのである。それではどのような場合に longus は‘長い’と異なるのかを具体的にみてみよう。

(a) 垂直方向上向きに対して、‘高い’と似た意味で使われる。この意味では主に身長の‘高い’人に対して使われているが、単に‘高い’のではなく、longus 本来の意味からすれば‘ひょろ長い’あるいは‘すらりとした’といった語感をもっているようである。

(7) longa decensque fuit—Ov. *Am.* 3. 3. 8

‘あの女はすらりとして美人だった’。

(8) qui mendacio staturam adiuvant longioresque quam sunt, videri volunt—Sen.

Ep. 111. 3 ‘背丈をごまかして実際よりも長身に見せている人は、人に見られたがっているのだ’。

この意味では他に糸杉にも使われている例がある。これに対し altus は語源的には alo ‘(私は)養う’の完了分詞であり、本来は‘養われたる、成人したる’という意味から出たはずであるが、むしろ人間よりも山や森や建造物などに使われることの方が多い。そして‘高い’だけでなく‘堂々とした、立派な’という意味がつけ加わってくる。したがって人間の場合は主に英雄や高貴な生れの人に対して、さらには神に対して、また動物の場合は象や馬のように姿の立派なものに対してそれがあてられる。

(9) cunctis altior ibat / Anchises—Verg. *Aen.* 8. 162～3

‘他の皆より 丈高く 堂々歩みし アンキーセース’

(10) Antiphus alto nil defensus equo—Stat. *Theb.* 7. 755

‘アンティプスは立派な馬なのに少しも手をかけてやらず’

したがって longus と altus はともに‘高い’という意味上の共通点をもっていながら、互いに競合する関係ではなかったのである。

(b) longus には‘(面積や地域が) 遠くまでおよぶ、広い’といった意味がある。

(11) dum longus inter saeviat Ilion Romamque pontus—Hor. *Carm.* 3. 3. 37

‘荒れ狂う 海がトロヤと このローマ 遠くへだてて いるかぎり’

(12) laudaturque domus longos quae prospicit agros—Hor. *Ep.* 1. 10. 23

‘それに屋敷は広い田畑を見はるかすといって賞讃を受ける’。

この意味の longus は次の (c), (d) の意味の longus とも関連している。

(c) longus には‘(遙か) 遠くの’という意味がある。

(13) cum gemitu, reboant silvaeque et longus Olympus—Verg. *G.* 3. 223

‘(牛どもの) うめき声にて こだますは 森と遙かな オリュムポス’

- (14) remeans longis olim Tiryntius oris...boves...egit ovans—Sil. 6. 628

‘かってヘラクレスが遙か遠くの地方から帰ってきたとき、牛を喜び勇んでつれてきた’。

- (d) longus には他に‘(傷や苦しみなどが)深く達する’といった意味がある。

- (15) longum ferens harundo vulnus—Sen. *Her. O.* 5. 574

‘矢が^{ふか}で深傷を運んできて’

- (16) longus vix tota peregit membra dolor—Stat. *Theb.* 5. 574

‘差し貫くような苦痛が身体中をかけめぐると’

この用法は(b)の用法の転じたものであろう。

専ら‘遠い’を意味する形容詞としては、語形からみると二時的な語構成をとっている longinquus があるが、この形は long- の要素をもっているけれども、longus から直接につくられたものではないようである。longus に並行して副詞形 longē があるが、この語の空間的な意味は‘遠く(に、で、から)、遙か(に)’に限られていて、‘長く’のような意味はない。このことや(c)の意味から long- は本来‘長’と‘遠’の意味を併せもっていたと考えられる。‘長い’と‘遠い’は‘二点間の隔りが大きい’という点では共通の意味をもっている。ラテン語はもともと‘長い’と‘遠い’を二つの語で区別していたのではなかったのである。しかし longus が主として‘長い’を表わすようになり、‘遠い’だけを意味する語が必要になってくれば、新たに既成の語構成法から類推して造語するのが自然であろう。次の平行関係をみられたい。

prope ‘近く’ [副詞] : propinquus ‘近い’ [形容詞]

ante ‘前に(へ)’ [副詞または前置詞] : antiquus ‘古い時代の’ [形容詞]

longe ‘遠く’ [副詞] : longinquus ‘遠い’ [形容詞]

longinquus ‘遠い’ が propinquus ‘近い’ からの類推でつくられたかどうかは明確にできないけれども、それらが longe や prope をもとに形成されたものであることは容易に推察できる。‘長い’と‘短い’は区別さるべき概念であり、基点とか目標点とかいった要素を導入すれば定義的にも両者は区別できるとするのは、現代人の考え方であり、両者を同一の語を用いて表現していた原初のラテン語の話し手にとっては、‘長い’も‘遠い’もスカラー的に同一の概念として映っていたのではないであろうか。longus とおゝかたの点で反意語である brevis は longus より一層スカラー的である。

4

longe から longinquus ‘遠い、遠く離れた、遠くからの’が‘長い’を意味することが多い longus では起こりやすい混乱をさけるためにつくられたが、これとは別に、同様の意味でありながら、‘隔っている’ことを表わす形容詞として動詞 disto の分詞形 distans がある。disto は語源的には‘(私は)離れて立つ’を意味する。longinquus が大きな長さとしての距離感を含意しているのに

対し, *distans* は二点が間隔を置いていることからくる距離感をもつといえようか. *distans* は‘二点が離れている’の意であることから, 必ずしも‘遠い’の概念を含まなくてもよい.

- (17) *trabes...distantes inter se binos pedes in solo collocantur*—Caes. *B.G.* 7. 23. 1

‘梁材は…たがいに60センチの間隔をおいて地上に並べられる’.

- (18) *legio mille passuum intervallo distans*—Liv. 33. 1. 2

‘軍団は一マイルの距離をおいて’

だが次の例では‘遠い’の概念を含むかどうかは微妙な点になってくる.

- (19) *nec sortita loco distantes flumina ripas / tuta manent*—Ov. *Met.* 2. 241~2

‘岸边から(遠く)隔った場所をわりあてられた流れも, (大火から)安全でいることはできない’.

しかし, 明らかに‘遠い’が含意されている例もある.

- (20) *tam distantibus in locis*—Cic. *Phil.* 2. 67

‘かくも遠隔の地に’

- (21) *prospicit, in liquida, spatio distante, tuetur / nescio quid quasi corpus aqua*—Ov.

Met. 11. 715~6 ‘彼女が海上を眺めていると, はるかな沖合に, 何かよくわからないけれども人間の体のようなものが波間にみとめられる’.

(17)~(21)の例で明らかのように, *distans* に‘遠い’の概念が含まれても含まれなくてもその意味の本質は変らない. 日本語で‘遠い’とか‘間隔をおいた’とか‘遥かな’と訳しても, それは日本語という別の体系に移しかえるときに便宜上そうなるだけのことで, ‘遠い’の概念が含まれるか否かにこだわってはいは *distans* の本来の意味が見失われるであろう. いま少しくわしくみてみると, *distans* には文脈に明示されない場合でも, 隔った二点が位置的にも話し手に意識されているのに対し, *longinquus* には遠い方の点だけが, 近い方の点から遠距離にあるということで意識にのぼっているらしく思われる.

- (22) *pecore ex longinquiribus vicis adacto extremam famem sustentarent*—Caes. *G.G.*

‘さらに遠くの部落から家畜を引きつれてきて, 彼等は餓死をふせいだほどであった’.

- (23) *peregrinatione longinqua*—Tac. *Ann.* 3. 24

‘遠い(異国の)遍歴から’

- (24) *in longinquum mittitur*—Gaius 50. 16. 233. 2

‘遠くへ向けて(矢が)放たれる’

- (25) *principibus adeunda saepius longinqua imperii*—Tac. *Ann.* 3. 34

‘元首のかたがたが領土の遠いところまで以前にもましてしばしば行かねばならぬ(事態になっている)’.

longinquus と *distans* は種々の辞典で両方が同義語であるかのような訳語に出合うけれども, それらの意味の差は以上にみてきたように, われわれにも明らかに感知できるものである.

longinquus と longe がその品詞の機能以外の部分で同様の意味をもっているのに対し, distans と品詞の機能以外の部分で同様の意味をもっている副詞は正確には見当たらないといえる。しかし近似的な意味をもっている副詞として procul がある。longe と procul もまたしばしば同義語であるかのような訳語に出合うけれども, 形容詞 longinquus と distans の間にある意味の差と同様の差があるのではないと思われる。procul は語源的には, similis ‘同様の’ と simul ‘同時に’, facilis ‘容易な’ と facul ‘容易に’ の関係にみられるように, 文献には在証されないけれども *procilis または *proculus⁽⁴⁾なる形と関連しているらしい。*proc(o)- には proceres ‘先導者たち, 高貴な人々’, reciprocus ‘(文字通りには‘後に前にの’) もとの道をとって返す’ などから判断すれば ‘前方へ導かれたる, 前方にある’ といった意味があるらしい⁽⁵⁾。しかし語源がどのようなものであれ, 用例から判断するかぎり procul は ‘離れて’ の意味が強い。しかも ‘目のとどかない(程度の) ところに’ といったニュアンスを加味している。simul ‘同時に’ に意味の上から比較級, 最上級の語形がないのと同じく, procul も比較できるような長さや距離の感覚をもたないので, 比較級, 最上級が存在しないのではないか。長さとしての距離感をもち, 動作主と遠い方の点の間が連続しているか一体となっている感じをもつ longe に longe lateque または longe et late ‘遠く広く, あらゆる方面に’ という成句があるのに, *procul lateque, *procul et late という組み合わせが存在しないことはこの解釈を裏づけているといえよう。

- (26) ut procul tela coiciant neu propius accedant—Caes. *B.G.* 5. 34. 3

‘遠くから(離れて) 飛道具を投げよ, これ以上近づかないように’。

- (27) iam oboluit Casinus procul—Pl. *Cas.* 814

‘すでに遠くで カスィーヌス 鼻をきかせて いやがった’

- (28) ubi ex lictoribus procul consulem esse, deinde iam propius ac certius...Brutum cognovit—Liv. 2. 6. 7

‘遠くからは警士達の様子からそれが執政官級の者であることがわかったが, ついでもっと近づくともうそれはまどうかたなくブルトゥスであることを彼は知った’。

- (29) ite procul, Musae, si non prodestis amanti—Tib. 2. 4. 15

‘ミューズ達よ, 恋する者のために役立たないのなら, どこか遠くへ行っておしまい’。

- (30)serta procul tantum capiti delapsa iacebant—Verg. *Ecl.* 6. 16

‘花環は彼の頭からすべり落ち, 少し離れて転がっていた’。

- (31) damnatur, ut procul regno teneretur—Tac. *Ann.* 2. 76

‘彼は有罪を宣告され, 王国から離される(立入りを禁じられる)’。

- (32) ut meam amicitiam sibi, etiam cum procul absim, prodesse sentiat—Cic. *Fam.* 13. 59

‘私がたとえ傍にいらなくても, 私の友情が自分には有難いものだと思ってくれるよう’

(26)～(29)の例では ‘遠く’ という訳語を使ったが, それは ‘(その場所から) 離れたところから, へ)’ と言い換えられる。procul は ‘離れて’ いることが不可欠であって, 動作主からどれ

ほどの間隔で離れているかははっきりしないか意識にのぼらないのが通例である。それに対し次の *longe* の例はいずれも、'遠く' の点と動作主の間が連続した長さとして意識されている。

- (33) *fumantis pulvere campos / prospexit longe*—Verg. *Aen.* 11. 908~9
'埃に煙る平原をはるかに眺め'
(34) *navis longe in altum apscesserat*—Pl. *Rud.* 66
'舟は遠く沖合に出てしまっていた'.
(35) *a cultu atque humanitate provinciae longissime absunt*—Caes. *B.G.* 1. 1. 3
'彼等はローマの属州の洗練された文物や文化から最も遠いところにいる'.
(36) *longe absum, audio sero*—Cic. *Fam.* 2. 7. 1
'私は遠くにいる。知らせを聞くのも遅い'.

この (36) の *longe absum* は (32) の *procul absim* と対照するとよくわかる。(32) では '私' は '彼' のそばから離れていてその場にいないのであるが、(36) では '私' は 'ローマ' から遠く離れたこの場に^{いる}のである。また、*longe* は長さとしての '遠く' であるから、数量で示される '遠く' を表わすこともある。この場合はむしろ '離れて' の方が日本語としては適当である。

- (37) *Vercingetrix... locum castris deligit paludibus silvisque munitum ab Avarico longe milia passuum XVI*—Caes. *B.G.* 7. 16. 1
'ウェルキンゲトリクスはアヴァリクムから 16 マイル離れたところで沼沢と森林に囲まれた場所を陣営に選ぶ'.
(38) *non longius mille passibus ab nostris munitionibus considunt*—Caes. *B.G.* 7. 791
'彼等は我軍の要塞から一マイルと隔たっていないところに駐屯する'.

この用法の *longe* は (18) の例文の *intervallo distans* '〜の間隔で離れて(いる)' とはほぼ同じ意味である。

以上にみてきたように、*longe* と *procul* は類義語ではあっても同義語ではなく、両者の意味の差は現代のわれわれにも説明できるのである。

5

次に西欧の近代語による辞書では意味の差がよくわからない *ante*, *prae*, *pro* について、それらの間にどのような意味上の、または用法上の差があるのかをみてみたい。品詞として分類すれば、*ante* は副詞と前置詞の両方の機能を持ち、*pro* と *prae* は前置詞である。ただし *prae* は *praequam*, *prae ut* の熟語を除けば、古典期直前の少数の用例で副詞としても使われている。しかし、三者とも動詞の前綴 (*preverb*) として多くの動詞と結合して副詞的に使われていること、しかもこれらは古い印欧語的な用法では語順も動詞の直前に限定されず、したがって独立した副詞であったことから判断すれば、副詞と前置詞の差を峻別しても、意味内容の差を理解するのにはあまり役立たないと思われる。この三者はいずれも、ラ-英辞典では *before*, *in front (of)*, ラ-仏では

devant, avant, ラ-独では vor などと訳され. 日本語でも ‘～の前に(で, へ)’ と訳せば, 殆どの場合あてはまる. 実際, Lewis and Short; *A Latin Dictionary*, Oxford, 1966 の ante の項には前置詞の “synonym” として prae, pro があがっているくらいである. またラテン語文献の上でも, とくに prae と pro は中世ラテン語ではしばしば混同されるようになるくらい似かよった意味をもっている. しかし, 古典期およびその後期のテキスト中の用例を読むかぎり, この三者は区別されていたと判断せざるを得ないのである. まず ante と pro に関して構文上似た文章を比べてみよう.

Hannibal ante muros urbis constitit.—(a)

‘ハンニバルは都の城壁の前に立った’.

Romani pro muris pugnabant.—(b)

‘ローマ軍は城壁の前で戦っていた’.

(a), (b) 二つの文章の ‘～の前に(で)’ は訳文だけではその差が表われないが, (a) の文のハンニバルは城壁を前に, それを攻撃しようとして立っているのに対し, (b) の文のローマ軍は城を守ろうとして城壁を背にその前で戦っているのである. 同様の例を二三あげてみる.

(39) ille Sythaeum impius ante aras...clam ferro incautum superat—Verg. *Aen.* 1. 348～

50 ‘非道極まる あの男 こともあろうに 神壇の 前にぬかずく シュカエウス
めがけてそっと しのび寄り 剣で不意打 くらわせる’

(40) ut ante suos hortulos postridie piscarentur—Cic. *Off.* 3. 14. 58

‘翌日彼の庭園の前で(漁師たちが) 漁をするように’

(41) armorum magna multitudo de muro in fossam quae erat ante oppidum iacta—

Caes. *B.G.* 2. 32. 4

‘大量の武器が城壁から町の前にあったの壕中へ投げこまれ’

(42) ipsi intus dextra ac laeva pro turribus astant—Verg. *Aen.* 9. 677

‘城の中では 自分らが 塔を背にして みぎひだり ならんで敵に 立ち向かう’

(43) cum eis navibus quae pro Calabriae litoribus in statione essent—Liv. 24. 11. 5

‘カラブリアの海岸に面して停泊していたあの船団とともに’

(44) ipse pro castris fortissime pugnans occiditur—Caes. *G.B.* 5. 37. 5

‘彼自身は自陣の前で勇猛果敢に戦って殺される’.

ante が動作主または話し手の眼前の対象物に対し, その前の空間を表わすのに比べ, pro は動作主または話し手が対象物を自分の背後においた場合の, その前の空間を表わすといえよう. ただ, ante, pro が esse ‘be, sein, être’ と共に使われたとき, そのような空間のとらえ方が, esse の主語と話し手との関係で理解しにくいかもしれない. その場合は動作主を話し手として対象物との関係を考えれば理解できるであろう. (41)では, 話し手であるカエサルは敵方の町と対峙して, その前に(ante) ある壕のことを言及しているのであり, (43)では, 話し手が海岸に立ち,

それを背に (pro) 前の海に向っている状況であると想定すればよい。したがって ante には動作主が対象物を前にそれと対立する気持ちがあるのに対し、pro には動作主が対象物を背後にその前でそれを保護・防禦しようとする気持ちがある。副詞としての ante には、

- (45) Iugurtham circiter duum milium intervallo ante consedis—Sal. *Iug.* 106. 5

‘ユグルタはおよそ二マイルの間隔をおいて敵に向って布陣した’。

- (46) loricatorum viros fortis cum equitatu ante praemisit—Caes. *B. Hisp.* 4. 1

‘甲冑に身をかためた屈強の者たちを騎兵隊とともに、敵に向って彼は先に派遣した’。

のように、‘前方へ’と訳すよりも‘敵に向って’と訳した方が適当な意味があるのに対し、pro が‘～のために’、‘～を守るために’という意味をもつのも、上記の意味の差から理解できるであろう。また ante に ante oculos, ante ora ‘～の眼前に’、ante pedes ‘～の足もとに’のような慣用句があるのに、pro にはそのような用法がないこともうなずけるのである。

次に prae と pro または ante との意味の差を考えてみる順序になるが、古典期およびその後期の文献に残っている用例をみるかぎりでは、空間を表わす前置詞としての prae は殆ど prae se の用法に限られるといってよいのである。prae se は prae の対象物(目的語)が se ‘自分’であるから、‘自分(=動作主)の前に(で、へ)’の意味であるが、それとともに使われる動詞が ferre ‘運ぶ、もたらす’、agere ‘追う、導く’、mittere ‘送る’、portare ‘運ぶ’といった物を移動させる概念を含むものに限定されている点は注意したい。

- (47) ille qui stillantem prae se pugionem tulit—Cic. *Phil.* 2. 30

‘血のしたたり落ちる短剣を自分の前でふりかざしたあの男が’

- (48) prae se armentum agens—Liv. 1. 7. 4

‘家畜を自分の前へ追いやりながら’

- (49) singulos prae se inermes mittere—Sall. *Ing.* 94. 2

‘丸腰のものをひとりずつ自分の前へつれてこさせる’

ところでこの prae se は、これと意味上の区別を明確につけにくい ante se と比較してみる必要がある。まず用例をみてみよう。

- (50) ipse...equitatemque onnem ante se mittit—Caes. *B.G.* 1. 21. 3

‘彼自身は全騎兵隊を自分の前に行かせる’。

- (51) ante se statuit funditores—Liv. 42. 58

‘彼は投石兵を自分の前に配置した’。

- (52) ante se quemque ducere fossam—Liv. 3.28.2

‘各人が自分の前に溝を掘る’

蛇足ながら、prae se と ante se の se は同形ではあるが、格がちがうことをつけ加えておきたい。前者が奪格、後者が対格である。ラテン語の格がもっている機能の一つとして、対格は、動作が対格で表わされる対象物の方向に向って行われることを示し、奪格は、印欧祖語の位格

(locative)⁽⁶⁾を併合しているので、奪格で表わされる場所において動作が行われることを示す。prae se と ante se のちがいをみるには prae と ante 自体のちがいだけでなく、それらが支配する格のちがいにも注目しなければならない。prae と ante の直接の対象となるのはともに se ‘自分’であるが、そこに動詞を参加させれば、それらが支配する格のちがいは、用例をみればわかるように、自分と動作の行われ方との関係をも変えることになる。もちろん格の機能のみがそれに関与しているのではない。しかし格の機能を考慮に入れなくては大きな誤りをおかすことになる。prae se は動作が自分の前で自分との相対的な位置を変えずに行われることを示し、ante se は動作が自分の前で方向性をもって行われることを示すといえるであろう。(48)の文では自分も家畜も動いていながら、両者の間がある距離に保たれていることを prae se が示している。また(51)の文では、他の場所にいた投石兵を自分の前へ来るように(ante se)配置した(statuit)のであり、(52)の文も ante se が各人が自分の前の地面に向って行く気持ち、または掘り進む様子を表わしているといえるであろう。

なを、動詞の前綴(preverb)となる ante-, prae-, pro- についても微妙な意味の差がそれらの間にあるが、それぞれの動詞の意味とも複雑に絡みあっているので、それをほぐし出すと単に空間の問題にとどまらなくなるおそれがある。この問題はこゝでは割愛したい。

6

ラテン語は空間の区切りのうち、上下の方向や位置を表わす語彙を他の方向や位置に比べて多くの発達させている。副詞と前置詞にかぎってそれらを一覧してみると次のようになる(⇔は反意語の関係、[副]は副詞、[前]は前置詞、(対)、(奪)はその前置詞が対格または奪格を支配することを示す)。

super [副, 前(対, 奪)] ‘(の)上に(で, へ)’	↔	sub [副, 前(対, 奪)] ‘(の)下に(で, へ)’
[一般的, suprā とよく混同される]		[一般的]
suprā [副, 前(対)] ‘(の)上に(へ)’	↔	subter [副, 前(対, 奪)] ‘(の)下に(で, へ)’
[‘下に’ と対比する意識がある]		[‘上に’ と対比する意識がある。‘(の)下にかくれて’の意味あいもある]
insuper [副, 前(対, 奪)] ‘その上に’	↘	infra [副, 前(対)] ‘(の)下に(へ)’
[上に何か物を接して置くとき]		[‘上に’ と対比する意識がある。‘基準に比べてより低い位置に’の意味もある]
dēsuper [副] ‘上から’		
[一般的]		
superne [副] ‘上から, 上へ向って’	↔	inferne [副] ‘下から, 下へ向って’
[逆の方向にも適用される]		[逆の方向にも適用される。ルクレーティウスだけ(?)の用語]
sursum [副] ‘上の方へ’	↘	deorsum [副] ‘下の方へ’ [方向だけ]
[方向だけ]		

上記の副詞、前置詞のうち、印欧祖語から直接に受け継いだと思われるのは super と sub だ

けである。たゞ、両語とも語頭音の s- については印欧祖語以来のものかどうかは疑問である⁽⁷⁾。他はラテン語が既存の語から独自に発達させた語形である。その *super* と *sub* が最も一般的であるが、上下の対比が意識される場合は *suprā* と *subter, infrā* が使われる（その逆は真ではない）。*suprā, infrā* はそれぞれ *super, infer*（形容詞 *inferus* ‘下の’の古形）からつくられたと推定できるが、それは *exter, inter, citer, *ulter*（比較級 *ulterior* は在証される）からそれぞれ *extrā, intrā, citrā, ultrā* がつくられたと推定するのと同様である。*extrā* ‘外（側）に’と *intrā* ‘中（側）に’、*citrā* ‘こちら（側）に’と *ultrā* ‘向う（側）に’はそれぞれ互いに反意語であり、一方が他方を対比させて意識の上にのぼらせることができる。したがって、*suprā et subter, suprā atque intrā* のような句がみられるのも同様な理由によって理解できる。ただし、上下の対比の意識といっても、*super* と *suprā, sub* と *subter, infrā* の差をことさらに説明すればのことで、それぞれの意味の差が感知できない場合もしばしばある。ただここで、ともに *suprā* の反意語である *subter* と *infrā* がどのような点で異っているかは説明しておかねばならない。*subter* は明らかに *sub* に、*inter* ‘～の間に’、*praeter* ‘～を越えて’、*propter* ‘～の近くに’などにみられる *-ter* をつけた形である。この *-ter* は *alter* ‘他方の’、*exter* ‘外の’などの形容詞の要素でもあり、溯れば印欧祖語の接辞 **-tero-* に行きつく。他の印欧諸語においても広く用いられたこの接辞 **-tero-* は本来二つの概念の対比を示すものであったと推定されている⁽⁸⁾。したがって *subter* は語源的には‘下側に’の意味であって、このことから‘上に’との対比の意識があるのが理解できよう。ところが実際の用例では、この本来の意味からずれてはいないものの、別のニュアンスが加わってくる例にしばしば出合う。割合としてはその方が多いのであるが、‘かくれていて見えない下の方に’といった意味で使われている。キケローが敵対者に好んで用いた *subter fugere* ‘こっそり逃げ出す’もこの *subter* の意味と共通点をもっている。

- (53) *terram fac ut esse rearis subter item, ut supera*—Lucr. 6. 536~7

‘大地は下方においても上方における様子と同じであると思いたまえ’。

- (54) *partim quod supter per terras diditur omnis*—Lucr. 5. 268

‘（水の）一部は大地全体にわたって下方へ分散するからである’。

- (55) *deinde subter mediam fere regionem sol obtinet*—Cic. *Rep.* 6. 17. 17

‘ついで、その下（地球と恒星天の間の）ほゞ真中の一帯を太陽が占める’。

- (56) *iram in pectore, cupiditatem subter praecordia locavit*—Cic. *Tusc.* 1.10.20

‘彼は怒りを胸のうちに、欲望を腹の下方に置いた’。

- (57) *occultas egisse vias subter mare*—Verg. *Aen.* 3. 695

‘（アルペウスの川水は）海の下のかくれた道を通ってきた’。

一方 *infrā* は *subter* とは役割りを異にし、同じく‘下に’でも、‘低い方に、^{しも}下手に’といった意味あい強い。それは必ずしも鉛直の方向の‘下に’ではなくてもよく、川の下流のようにむしろ水平方向に近い‘低い方に＝下流に’を表わすこともあり、慣習的に‘^{しも}下の方’とみなされている。

‘南に’や食卓の下手である‘右に’を表わすこともある。

- (58) per nudam infra glaciem...ingrediebantur—Liv. 21. 36. 6

‘(新雪の)下で露出した氷の上を彼等は進んでいった’。

- (59) veluti cum flumina natas exhalant nebulas nec sol admittitur infra—Ov. *Met.* 13.

602~3 ‘ちょうど川面が立ち昇る靄をはき出すと、陽の光も下の方までとどかないように’

- (60) infra arcem caesi captique multi mortales—Liv. 4. 61. 7

‘高城の下手(の町)では多くの人が殺されたり、捕えられたりした’。

- (61) transeunt Rhenum...triginta milibus passuum infra eum locum—Caes. *B.G.* 6. 35. 6

‘その場所から30マイル下流で彼等はライオン河を渡る’。

- (62) ut una pars supra Ephesum, altera infra Ephesum navigaret—Cic. *Flac.* 32

‘(艦隊の)一方はエペソスの北を、一方はエペソスの南を通過したのだから’

insuper, dēsuper に反意語が存在しないのは、それらの意味から当然理解できるであろう。一見 dēsuper の反意語のようにみえる dēsub は古典期ラテン語には在証されないだけでなく、意味も‘下から上の方へ’でなく、単に‘～の下に’である。

注

- (1) フランス語 haut, イタリア語 alto には‘深い’の意味があり, altum mare, ‘沖, 外洋’を受けついだと思われるスペイン語 alta mar ‘沖’にもその痕跡が認められるように, ロマンズ諸語には部分的にせよこの意味が継承されている。
- (2) 印欧祖語の語根は *bhu(n)d(h)-. Gr. *πυθμήν*, Skr. *budhna-*, OE. *botm*, etc.
- (3) *Oxford Latin Dictionary*, fascicle 1, 1968 の *brevis* の項。
- (4) 固有名詞 *Proculus* は別。
- (5) K. Brugmann, *Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, II², 2, 1911, p. 678.
J. Pokorny, *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*, 1959, p. 815.
- (6) 地格, 於格, 処格, 所格, 位置格などの種々の訳語があり, 定訳がない。
- (7) A. Ernout et A. Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 4^e éd., 1959, p. 660.
- (8) A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* 8^e éd., 1937, p. 271.